子ども学会議の20年

日本子ども学会では2004年から本学会の学術集会である「子ども学会議」を開催して参りました。
学会創設20周年を機に、設立総会を含めた21回の大会の概要をまとめました。

＊会場名や大会長の肩書は、当時のものです。

回	年	会場	回	年	会場
設立総会	（2003年）	白百合女子大学	第 11 回	（2014年）	白百合女子大学
第 1 回	（2004年）	早稲田大学国際会議場	第 12 回	（2015年）	甲南女子大学
第 2 回	（2005年）	東京大学	第 13 回	（2016年）	静岡大学
第 3 回	（2006年）	甲南女子大学	第 14 回	（2017年）	ＩＰＵ環太平洋大学
第 4 回	（2007年）	慶應義塾大学	第 15 回	（2018年）	同志社女子大学
第 5 回	（2008年）	奈良女子大学	第 16 回	（2019年）	首都大学東京
第 6 回	（2009年）	お茶の水女子大学	第 17 回	（2021年）	滋賀県立大学
第 7 回	（2010年）	川越市市民会館	第 18 回	（2022年）	東海学院大学
第 8 回	（2011年）	武庫川女子大学	第 19 回	（2023年）	白百合女子大学
第 9 回	（2012年）	JST東京本部別館	第 20 回	（2024年）	八戸文化幼稚園
第 10 回	（2013年）	岡山県立大学			

日本子ども学会 設立総会

- **2003年11月29日（土）**
- **白百合女子大学**（東京都調布市）
- **主催　日本子ども学会 設立準備委員会**

― 挨拶 ― 「設立総会を迎えて」小林 登

いよいよ「日本子ども学会」（Japanese Society of Child Science）が船出することとなりました。

本学会は、子どもに関心をお持ちの方なら、どのような学問分野の研究者であろうと、どのような活動を行う実践者であろうと、また作品づくりや製品づくりを通じて子どもを支援する開発者であろうと、どなたでも参加し、お互いの意見を交換する場をつくり上げていくことを目的にしたいと思います。そのことによって、21世紀の新しい子ども観を確立するための基盤研究を進め、「子ども学」の柱をつくり上げ、子どもの問題（Children Issues）のより良い解決法、さらに子どもを健やかに育てるための「もの」や「こと」のより良いデザイン（Child Care Design）を体系づけたいと思います。

「もの」は昔ながらの玩具から始まって絵本やマンガ、ゲーム機器にいたるまで、「こと」は教育に始まって行政や経済にいたるまで、いろいろと考えられます。ご参加の皆様には、それぞれに研究活動のグループをつくるなど交流を深めていただいて、年1回の総会で会員一同と話し合っていただきたいと思います。

21世紀こそ子どもの世紀にする動きを、まず日本から皆様とともに始めようではありませんか。

主なProgram・登壇者

■開会挨拶
小林 登
■基調講演
「子ども学と進化生物学」　佐倉 統
■特別講演
①「子どもの社会力」　門脇厚司
②「ユニヴァーサルデザインと子ども文明」　石井威望
■シンポジウム
「子ども学の視点 文理融合科学の可能性と課題」　麻生 武、開 一夫、榊原洋一、佐倉 統、宮下孝広
■研究実線事例
①「心が通う身体的コミュニケーション技術」　渡辺富夫
②「音楽を使ったケア・デザイン」　長田有子

日本子ども学会学術集会
第1回 子ども学会議

●2004年9月4日（土）・5日（日）
●早稲田大学国際会議場（東京都新宿区）
●大会長　小林 登（日本子ども学会代表・東京大学名誉教授）

テーマ 「メディア社会と子どもたち」

生れて間もない頃から子どもを長時間メディア漬けにすると「言葉の発達が遅れ」たり「視線が合わなくなる」などといった報告が医療現場からなされています。また、マスコミでは「子どもによる子どもの殺人」がメディアの栄養ではないかといった報道もされています。本会議ではこれらの問題に科学的根拠があるかを検証するとともに、メディアをつくる側の意見にも耳を傾けます。そして、チャイルド・ケア・デザインの立場からメディアを考え、その利用法について考えていきます。

◎ 第1回子ども学会議には多くのマスコミが集まり、時機を得たテーマに大きく反応した。

◎ ポスターセッションは15件

主なProgram・登壇者

■代表講演
「子ども学とは何か ―育つ育てる」　小林 登
■特別講演
「野生のゴリラと野生の子ども」　山極寿一
■研究報告
「子どもの発達と養育環境要因との関連に関する縦断研究」　菅原ますみ
■シンポジウム1
「徹底討論:幼児のメディア視聴は是か非か?」　榊原洋一、菅原ますみ、谷村雅子、土谷みち子
■シンポジウム2
「子どもとメディアの未来を考える」　岩谷 徹、関 弘美、廣瀬通孝、矢野直明、沢井佳子
■教育講演
①「『子どもの安全・安心対策』を根本的に再検討する」　清水賢二
②「子どものための建築環境デザイン」　柳澤 要

日本子ども学会学術集会
第2回 子ども学会議

●2005年9月3日（土）・4日（日）
●東京大学医学部教育研究棟（東京都文京区）
●大会長　牛島廣治（東京大学大学院 医学系研究科教授）

テーマ 「多文化社会と子どもたち　―未来をつくる共生と支援―」

在日外国人の数が増加し、それに伴って国際結婚をする夫婦も増える中で、複数の文化や複数の言語のもとに生活する子どもたちの発達支援が、子ども学の重要な課題になっています。そのような子どもたちが幸せに生きられる社会をどう構築するのか、共生によって私たちの社会がどのような豊かさを手に入れることができるのか。未来へ向けての課題について考えました。

◎ 厚生労働省の後援をいただいた。

主なProgram・登壇者

■基調講演
「多文化に生きる子どもたち」　佐藤郡衛
■特別講演
「脳科学と言語」
①「第二言語習得と子どもの脳」　酒井邦嘉
②「言葉を失う脳」　岩田 誠
③東アジア地域におけるECCE（就学前のケアと教育）の展開と現状」　田 輝、朱 家雄
■シンポジウム1
「文化間移動と子どもの発達」　山本雅代、塘利枝子、ヒダシ・ユディット
■シンポジウム2
「在日外国人の子どもの現状と支援」　箕浦康子、中村安秀、丹羽雅雄
■要望演題
「在日外国人の子どもの現状と支援」　小島祥美、平野知見、辺 貞姫、石川えり
■一般演題
「子どもと睡眠」　鈴木みゆき、松浦倫子、石渡貴之

日本子ども学会学術集会

第3回 子ども学会議

●2006年9月2日（土）・3日（日）
●甲南女子大学（神戸市東灘区）
●大会長　稲垣由子（甲南女子大学教授、国際子ども学研究センター所長）

テーマ 「子ども学の未来を考えよう」

甲南女子大学では、阪神淡路大震災の翌年、平成8年に小林登先生が「子ども学講座」を開設されました。そして、平成10年には「国際子ども学研究センター」が設立され、来たる平成18年4月には「総合子ども学科」が誕生します。「子ども学」を冠した学部・学科は今や全国に50ほどもありますが、「子ども学」のとらえ方は微妙に異なっています。学際的な学問のあり方を問うことで、「子ども学」の歩むべき方向を考えました。

◎ ポスターセッションの時間に、「learning by making『クリケット・ワークショップ』」と題して、子どもが参加するワークショップ型授業が行われた。

主なProgram・登壇者

■基調講演
「『子ども学』の歴史的背景と今後の展開を考える」　小林 登
■特別講演
「子どもをめぐる現在」　本田和子
■シンポジウム
「大学教育から『子ども学』の未来をかんがえよう」
浜田寿美男、吉岡眞知子、今村方子、竹内伸宣、稲垣由子
■特別講演
「物や環境が行為に与えていること ～『動く赤ちゃん事典』に見るヒトの発達～」　佐々木正人
■シンポジウム
「現場から『子ども学』の未来を考えよう」　京極正典、友田尋子、西口純子、赤澤真旗子
■子ども参画事業
「「ミュージアム・リテラシーを育む『ふでばこ展覧会』」　佐藤優香、上田信行
■要望演題（関連演題）
麻生 武、榊原洋一、所 真里子

日本子ども学会学術集会

第4回 子ども学会議

●2007年9月15日（土）・16日（日）
●慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）
●大会長　安藤寿康（慶應義塾大学文学部教授）

テーマ 「子ども・進化・脳科学 ー生命の科学と子ども学ー」

現代の生命科学は、どのような子ども像を浮き彫りにするのでしょうか。本大会に参加すれば、「子どもの生命科学」が一望できる、そうした学会にしたいとプログラムを組みました。まだ萌芽的なものも数多くあり、それは「いま」という時代性を超えることはできませんが、しかし参加された皆様はおそらく、これらの成果を素材に、新しい「子どもの物語」を探索し、創出してくださることでしょう。「子どもの科学」を軸とした新しい「子どものための物語」を語り合う2日間です。

◎ 2日目の午後に「懸賞エッセイ」授賞式を行った。懸賞エッセイは、2003年から5年間行った。HPで読むことができる。

主なProgram・登壇者

■基調講演
「進化から見たヒトの子どものユニークさ」　長谷川眞理子
■基調講演
「脳科学から見た子どもの教育」　小泉英明
■座談会
「ダーウィン先生を囲んで」　長谷川眞理子、榊原洋一、安藤寿康、佐倉 統
■シンポジウム
①「進化の中の子ども」　中村徳子、デビット・スプレイグ
②「子どもと世界の異なる出会い」　鈴木秀樹、塚田美紀、真壁宏幹
③「危機とともに生きる子どものための科学」　北澤 茂、神山 潤、長谷川奉延、山本淳一
■講演
①「遺伝と環境によって育まれる子どもの脳」髙橋孝雄
②「ふたごが明かす脳と行動の形成過程」安藤寿康
③「先史時代の子ども」忽那敬三

日本子ども学会学術集会
第5回 子ども学会議

●2008年9月27日（土）・28日（日）
●奈良女子大学記念館（奈良県奈良市）
●大会長　浜田寿美男（奈良女子大学教授）

テーマ 「問題としての子どもから存在としての子どもへ ーいじめ理解を深めるためにー」

本大会で扱ったのは、「いじめ」でした。子どもたちの世界で、自死にもいたる陰湿ないじめがはびこっています。しかし、それは子どもが変わったからではなく、子どもが生きる状況が変わったのだと考えられます。基調講演で大阪大学の鷲田清一総長は、いじめは子どもだけの問題ではないとして、「我々の社会が排除の論理に対抗する、集団形成の論理を作れていないこと」が、いじめを阻止できない根本的な理由の一つと語りました。本大会は、いじめの単なる対症療法を語るのではなく、人間の存在の地平から深く考察するものとなりました。

◎ 会場の「奈良女子大学記念館」は奈良女子高等師範学校の本館として明治42年（1909）に建てられたもの。国の重要文化財。

主なProgram・登壇者

■大会推進委員長挨拶
「いじめ理解を深めるために」　浜田寿美男
■基調講演
「“いじめ”から見えてくるもの ー社会の問題として」　鷲田清一
■特別講演
「子どもたちの声から」　大河内祥晴、伊東 毅、東村知子
■シンポジウムⅠ
「いじめの背景となる子どもたちの仲間関係」
麻生 武、内藤朝雄、丸山まりこ、池田曜子、土方由起子
■シンポジウムⅡ
「いじめを再定義する」　浜田寿美男、伊東 毅、土井隆義、内藤朝雄

日本子ども学会学術集会
第6回 子ども学会議

●2009年9月12日（土）・13日（日）
●お茶の水女子大学（東京都文京区）
●大会長　内田伸子（お茶の水女子大学教授）

テーマ 「子ども・環境・脳科学」

子どもの成長・発達を支援する人的・物的環境はどのようなものが望ましいか、子どもの成長・発達に不可欠なものは何か。本大会では、遺伝と環境、メディアと子ども、早期教育、遊び、子育て支援などをめぐって、発達心理学、脳科学、小児医学、認知科学、メディア教育、子ども文化など学際的な先端科学の知見を持ち寄り、子育て現場で使える臨床知にするための活発な学術交流が行われました。

◎ シンポジウム①と②、及びシンポジウム③と④はそれぞれ2会場、同時開催で行った。

主なProgram・登壇者

■代表講演
「日本子ども学会はチャイルドケアリング・デザインを展開しよう」　小林 登
■基調講演　「子どもが忌避される時代」　本田和子
■シンポジウム
①「今、早期教育を考える」　榊原彩子、有路憲一、村松暢隆、藤永 保、榊原洋一
②「子どもとゲームをめぐる過去・現在・未来」　松原 仁、小林康秀、坂元 章、開 一夫
③「良質のチャイルドケアリングとは」　菅原ますみ、榊原洋一、遠藤幸子、汐見捻幸、小林 登
④「子育てを手助けする『頼りになる情報環境』の構築に向けて」
板倉正二、桐山伸也、佐藤久美子
■鼎談
「狼少女はなかった」　鈴木光太郎、榊原洋一、内田伸子

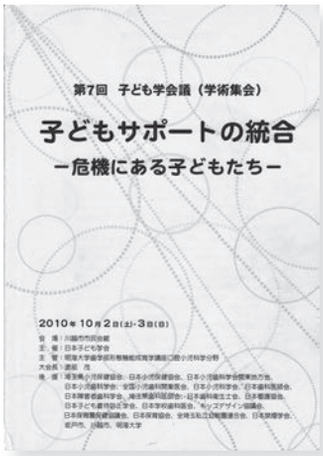
日本子ども学会学術集会

第7回 子ども学会議

●2010年10月2日（土）・3日（日）
●川越市民会館（埼玉県川越市）
●大会長　渡部 茂（明海大学歯学部教授）

テーマ 「子どもサポートの統合 ー危機にある子どもたちー」

本大会では、子どもを長期間、定期的に観察できる立場にあり、生活を反映する口腔疾患・機能を専門とする小児歯科学領域から見た、子どもたちが抱える多くの問題点を提起しました。小児歯科医は日々子どもたちの口の中を見つめています。子どもの口の中は彼らの世界を現しています。子どもを取り巻く教育、医療、保健、福祉等、各領域の専門家が連携を取り、様々な専門領域の知を結集することで子ども学への理解を深めるとともに、危機にある子どもたちを救う方法を探りたいと考えました。



◎ 同館の会議室では、市民公開講座「お母さんは救命士」やランチョンセミナー「効果的な口腔衛生指導」などの講座・イベントが開催された。

主なProgram・登壇者

■大会長講演
「小児歯科と子ども学」　渡部 茂
■教育講演
「歯科から行う子どもの食育支援」　井上美津子
■特別講演
①「Child Care and Child Development」　サラ・フリードマン
②「歯と口の保健と子どもの成長」　高木裕三
■シンポジウム
①「子どもを煙草から守る」　高橋裕子、野田隆、高橋裕子、三浦秀史、王 宝禮
②「発達障害:自閉症をめぐって」　平岩幹男、藤坂龍司、渡辺志津子、白川哲夫
③「子ども虐待:子どもの医療関係者による虐待早期発見と予防」
峯 真人、清水裕子、佐藤協子、牧 憲司
④「子どもの傷害予防に取り組む」　山中龍宏、福田英輝、小野裕嗣、掛札逸美
⑤「子どもの貧困を根絶していくために」　松本伊智朗、鳫 咲子、青砥 恭、森岡俊介

日本子ども学会学術集会

第8回 子ども学会議

●2011年10月1日（土）・2日（日）
●武庫川女子大学（兵庫県西宮市）
●大会長　河合優年（武庫川女子大学教授）

テーマ 「育ちと学びを支える」

本大会は、東日本大震災という未曽有の災害の直後に開催されました。これを受けて、秋篠宮妃 紀子殿下のご臨席を賜り、大会2日目に「東日本大震災の子どもたちを支える」ためのシンポジウムを開催いたしました。

◎ 1日目のテーマを「子どもの育ちと学び」、2日目のテーマを「東日本大震災の子どもたちを支える」と題して開催した。

主なProgram・登壇者

【1日目／子どもの育ちと学び】
■大会長挨拶
「育ちと学びを支える」　河合優年
■シンポジウムA
「小児医療から見た子どもの育ち」　藤村正哲、金澤忠博、河合優年
■基調講演
「現代社会と子どもの発達問題を考える」　玉井日出夫

【2日目／東日本大震災の子どもたちを支える】
■シンポジウムB
「震災の子どもたちを支える ー阪神淡路大震災が伝えるもの」
八木俊介、中溝茂雄、小石寛文、一色伸夫
■シンポジウムC
「震災の子ども達を支える ー今なにが起きていて何がもとめられているのか」
大坂 純、吉田穂波、佐々木丈二、八木俊介、中溝茂雄、内田伸子

日本子ども学会学術集会
第9回 子ども学会議

●2012年10月20日（土）・21日（日）
●JST東京本部別館 1階ホール（東京都千代田区）
●大会長　安梅勅江（筑波大学大学院教授）

テーマ 「子どもの生きる力を育む ーエンパワメント環境づくりに向けて」

本大会では未曽有の災害から新たな地平へ。子どもたちが「生きる力」を未来に向かって最大に発揮する仕組みづくりを考えました。保育、教育、保健、医療、福祉、芸術、安全管理など多彩な領域に及ぶ実践者と研究者の知恵を学際的に架橋し、子どもたちのエンパワメント環境づくりを具体的に発信します。

主なProgram・登壇者

■基調講演
「Sense of Wonderを育む科学と環境づくり」　小泉英明
■大会長講演
「子育ち子育てエンパワメント　WEB活用の可能性」　安梅勅江
■教育講演
「スピリチュアル･ケアとエンパワメント」　石井享子
■シンポジウム
「子どもの生きる力を育むエンパワメント」　落合早苗、三浦剛、有村大士、
■ワークショップ
①「触れる、つくる、感じる　木育エンパワメント」　松井勅尚、雲山晃成、野倉照子
②「つながる、かがやく、ひびく おもちゃエンパワメント」　多田千尋

◎ 生きる力を育むエンパワメントの理論と実践を講演とワークショップで体感した。

◎ 大会初の試みとして優秀発表賞を3名表彰した。

日本子ども学会学術集会
第10回 子ども学会議

●2013年10月12日（土）・13日（日）
●岡山県立大学（岡山県岡山市）
●大会長　渡辺富夫（岡山県立大学教授）

テーマ 「つながるチャイルドサイエンス 遊びと学び ーおもちゃ･ロボット･メディアー」

日本子ども学会設立10周年を記念し、本大会では、1日目に原島博先生の「ハラッパで三兎を追う」と浅田稔先生の「子どものこころを育むようにロボットのココロを育てる」という2つの基調講演を行っていただき、最先端研究と深い洞察に触れました。また2日目には「つながるチャイルドサイエンス」と題したシンポジウムと10 周年記念シンポジウム「チャイルドサイエンスの未来」で子ども学の未来を俯瞰し、輝かしい子どもの未来に向けて議論を深めました。

主なProgram・登壇者

■基調講演1
「ハラッパで三兎を追う」　原島 博
■基調講演2
「子どものこころを育むようにロボットのココロを育てる」　浅田 稔
■シンポジウム
「つながるチャイルドサイエンス」　渡辺公貴、三宅なほみ、竹林洋一
■10 周年記念シンポジウム
「チャイルドサイエンスの未来」　内田伸子、原島 博、坂上浩子
■10 周年記念講演
「子どもは未来である」　渡辺富夫
＊小林登先生が止むなく欠席となったため、渡辺大会長がうなずきロボットや共感インタフェースの研究開発を紹介し、情動共有やつながることの重要性など、小林先生の思いの一端を語った。

◎ 学会設立10周年記念事業の一環として、大会翌日にはベネッセコーポレーション本社講堂で国際シンポジウム「子どもの生命と権利を守るために」を開催。

日本子ども学会学術集会
第11回 子ども学会議

●2014年9月27日（土）・28日（日）
●白百合女子大学（東京都調布市）
●大会長　宮下孝広（白百合女子大学教授）

テーマ 「文化的・社会的存在としての子ども」

「子どもは、生物学的存在として生まれ、社会的存在として育っていく」とは、小林登名誉理事長常々口にされていた言葉です。本大会は、このような存在である子どもを理解するには、文理融合科学として「子ども学」を創り、多彩な研究分野から領域横断的に子どもについて語るフォーラムとして学会を盛り上げていく必要があるという創設以来の熱い思いに、再び油を注ぎたいという願いに導かれて開催いたしました。

◎ 子どもたちを育む自然環境や文化的・社会的環境について、教育的・芸術的な働きかけも含めて考えていきたいとの願いのもと写真展とワークショップを開催した。

主なProgram・登壇者

■ 講演
「社会性の起源を探る ― 乳幼児研究から見えてくるもの」　開 一夫
■ シンポジウムA
「子どもの活動が地域社会を創る」　笠間浩幸、宮下孝広、新崎国広
■ シンポジウムB
「文化的・社会的環境で育つ子ども ―アフリカ子ども学の試み」　亀井伸孝、清水貴夫、山田肖子、竹ノ下祐二、スィアウ オンウォナ-アジマン
■ 講演
「知は力なり? ― 社会と子供が科学技術を使いこなすためには」　佐倉 統
■ 理事長講演
「子どもは未来だから ― 日本子ども学会の果たす役割」　榊原洋一
■ 特別企画
①写真展「コドモノクニ」　齋藤亮一
②「子どもたちのクリエイティブ・ワークショップ」　西岡直実

日本子ども学会学術集会
第12回 子ども学会議

●2015年10月10日（土）・11日（日）
●甲南女子大学（兵庫県神戸市）
●大会長　中井昭夫（兵庫県立リハビリテーション中央病院 子どもの睡眠と発達医療センター副センター長）

テーマ 「かしこい身体、じょうぶな頭、しなやかな心 ―子どもの睡眠と運動と脳とこころの発達―」

本大会では、身体性、生体リズム、多様性、発達障害、先制医療、レジリエンスなどをキーワードに、子どもの「脳」と「こころ」の発達における身体性の重要性について議論できる場となるプログラムを企画しました。講演やシンポジウムなどはいずれも刺激に満ち、白熱したディスカッションが展開されました。

◎ 他にランチョンセミナーやラウンドテーブルなども行われた。

◎「子ども学」のさらなる普及のために、新規入会と参加費のセット割の設定を行い、過去最高の491名が参加、58名が新規入会した。

主なProgram・登壇者

■ 教育講演
「子ども一人ひとりのためのスリープフィットネス ～いつ寝るべきか、どれだけ寝るべきか～」　三島和夫
■ 大会長講演
「かしこい身体、じょうぶな頭 ～身体性からみた子どもの脳とこころの発達～」　中井昭夫
■ 基調講演
「赤ちゃんに社会生活リズムを教える」　三池輝久
■ 特別講演
「じょうぶな頭、しなやかな心 ～子どもたちの生きる力、本当の自立のために必要なこと～」　品川裕香
■ シンポジウム
①「不器用な子どもたち ～発達性協調運動障害という視点からの理解と支援～」
笹森理絵、岩永竜一郎、澤江幸則、中井昭夫
②「子どもの睡眠障害の最前線 ～治療から先制医療、そして眠育へ～」
田島世貴、加藤隆史、前田 勉、三池輝久
③「子どもが地域社会でともに育ち合う環境とは ～認定こども園・家庭・研究者の責任～」
山縣文治、北野幸子、安家周一、梅崎高行、榊原洋一

日本子ども学会学術集会
第13回 子ども学会議

●2016年10月8日（土）・9日（日）
●静岡大学 浜松キャンパス（静岡県浜松市）
●大会長　竹林洋一（静岡大学教授）

テーマ 「長寿社会の子どもと情報学 ー家族・地域・メディアとつくる子どもの未来ー」

本大会では、長寿社会で多世代が共に担う諸問題の解決に向けて、「子ども」をキーワードに、インタラクション（相互作用）の科学である「情報学」の視点から諸学問の領域を架橋する学術集会にしたいと考えました。認知科学の第一人者である安西祐一郎先生や認知症ケア技法「ユマニチュード」の考案者であるイヴジネスト先生の講演に加え、2つの魅力的なシンポジウムや多世代交流をテーマにした市民公開講座などを通じて、子どもと家族が安心して暮らせる未来と、子ども学の発展に貢献することを目指しました。

◎ 他に市民公開講座「気づきを育む多世代交流―インタラクションの仕掛け創り」も行われた。

◎ ポスター発表は44件。初の試みとして、30秒の概要発表を行い、発表者の発表意識を高めるとともに、参加者のスムーズなポスター誘導につなげた。

主なProgram・登壇者

■ 基調講演
「未来に生きる子どもたちのために ―おとなは何がしたいのか?―」　安西祐一郎
■ シンポジウム1
「童心と老成をつなぐ情報学 ―長寿社会の子どもが築く未来の地域と文化―」
鈴木康友、安西祐一郎、榊原洋一、竹林洋一、鬼頭 宏
■ 特別講演
「Three Births of life（人生における3つの誕生） ―『あなたは大切な存在です』と伝えるための哲学・技術・科学―」
イヴ・ジネスト
■ シンポジウム2
「特別でない特別支援教育 ―学習障害・ディスレクシア当事者と考える、これからの特別支援教育と合理的配慮について ―」
砂長美ん、あーちゃん、河野俊寛
■ 大会長講演
「情報学が拓く長寿社会」　竹林洋一

日本子ども学会学術集会
第14回 子ども学会議

●2017年10月21日（土）・22日（日）
●IPU環太平洋大学（岡山県岡山市）
●大会長　大橋節子（環太平洋大学学長）

テーマ 「子どもとスポーツ新時代 ー変革の時代を生き抜くための『非認知能力』とはー」

本大会では、アスリートの為末大氏とスポーツドクターの辻秀一氏による2つの基調講演、元NHK アナウンス室長の山根基世氏の特別講演に加え、多彩な顔ぶれによるシンポジウムやポスターセッション、子どもたちのためのワークショップを行いました。また、IPUマーチングバンド部の演奏をはじめ、三浦雄一郎記念ブース、学生特別企画・展示等を通じて、研究者、教育実践者、保護者、子どもたちと交流。子どもに配慮した社会づくり推進のけん引役として幅広い交流の場にすることを目的としました。向けて議論を深めました。

◎ 2日目の昼には総社市や瀬戸南高校、岡山県内の企業などの協力のもと、産学共同企画の「コミュニケーションランチ」を開催した。

主なProgram・登壇者

■ 基調講演
①「ハードルを越える ～マインドセット～」　為末 大
②「スポーツを通して子供たちの生き方を考える」　辻 秀一
■ 大会長講演
「未来を変える子ども達 ー私が身体にこだわるわけー」　大橋節子
■ シンポジウム
「地元を元気にする子どもを育てる ー創意工夫の実践活動ー」
片岡聡一、中塚志津子、山田郁子、徳山順子、長谷浩也
■ 特別講演
「子どもの心を満たす“声の力・言葉の力”ー音読ではなく朗読の深みへー」　山根基世
■ ワークショップ
「子ども達のしなやかなからだとこころを育むエクササイズ」
・ダンス表現／小澤尚子　・姿勢教育／前川真姫　・運動遊び／ 津田幸保

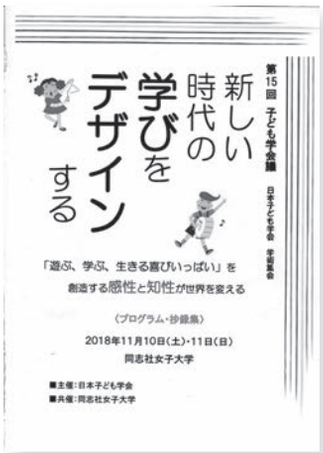
日本子ども学会学術集会

第15回 子ども学会議

●2018年11月10日（土）・11日（日）
●同志社女子大学（京都府京都市）
●大会長　上田信行（同志社女子大学 特別任用教授）

テーマ 「新しい時代の学びをデザインする ー『遊ぶ、学ぶ、生きる喜びいっぱい』を創造する感性と知性が世界を変えるー」

本大会では、参加者の皆様にプレイフルスピリットを感じていただけるよう、教職員と学生スタッフ90名が共に創り上げる新しい会議デザインのスタイルにチャレンジしてみました。1日目は、基調講演とワークショップを融合したプレイフルラーニング・ワークショップでスタート。2日目は、学生と教員とで語る2つのシンポジウム、さらに建築家の小堀哲夫氏を招いたシンポジウム「21世紀型の学習空間を考える」など、プレイフルなプログラムが実現できました。



◎ 大会2日目のランチ・昼休みの時間にUnconference（学会の間にトピックを募集し、小グループで話しあう即興的セッション）を開催した。

主なProgram・登壇者

■ 基調講演／ワークショップ
「プレイフルラーニングで子ども学をROCKしよう! ―創造的な学びを耕す学習環境デザイン―」
上田信行

■ 講演
①“楽しい”が広げる子どもの創造的学び ー砂場から見る子どもの成長と発達の軌跡ー」
笠間浩幸
②「これからの子ども学を考える」　榊原洋一
③（市民公開講座）「脳科学とプレイフルラーニング」　仁木和久

■ シンポジウム
①「子どもの創造性あふれる空間デザイン」
吉永紀子、篠﨑洋暢、笠間浩幸、白石真奈美、高木優月、柳澤 唯
②「当事者が語る私自身の学びの創造性 ー場・人・もの のデザインを通して『自分』を発見し創造するー」
塘 利枝子、吉永紀子、西本奈穂、西谷柚香、谷 梨紗、西垣侑花
③「21世紀型の学習空間を考える」　小堀哲夫

日本子ども学会学術集会

第16回 子ども学会議

●2019年10月26日（土）・27日（日）
●首都大学東京（東京都八王子市）
●大会長　酒井 厚（首都大学東京准教授）

テーマ 「友だちってなんだ? ー家族・学校・メディアからみる子ども同士の世界ー」

本大会では、子どもの友だち関係を家族、学校、メディアという3つの文脈から議論するシンポジウムを企画しました。シンポジウムⅠでは、友だちという存在のルーツについて家族との比較から考え、シンポジウムⅡでは、学校生活における子どもにとっての友だち関係の機能を、肯定と否定の両面から検討しました。シンポジウムⅢでは、これまでのメディアが子ども同士の関わりをどう捉えてきたか、またこれからメディアが友だち関係の在り方にどう関わるかを話し合いました。いずれも多様な専門性からの学際的な議論の場となり、子どもにとっての“友だちの意味”を探究する有意義な時間となりました。

◎ 1日目の午後に、「5歳児が1 日に分泌する総唾液量」の研究により2019年度のイグ・ノーベル賞を受賞された渡部茂先生（明海大学教授）の受賞記念講演を行った。

主なProgram・登壇者

■ 基調講演
「友だち関係を科学する ー発達心理学からの視点ー」　酒井 厚

■ 講演
「子どもをめぐる学問のつながり」　榊原洋一

■ シンポジウムⅠ
「家族から看る子ども同士の世界」　安藤寿康、岸本健、亀井伸孝、根ケ山光一

■ シンポジウムⅡ（市民公開講座）
「学校から見る子ども同士の世界」
眞榮城和美、鈴木智裕、やたみほ、石坂 浩、宮本信也、高橋英児

■ シンポジウムⅢ（市民公開講座）
「メディアから視る子ども同士の世界」　坂上浩子、おおばる、中野博之、菅原ますみ、酒井 厚

■ イグ・ノーベル賞受賞記念講演
「人々を笑わせて考えさせる研究　Ig Nobel Prize」　渡部 茂

日本子ども学会学術集会
第17回 子ども学会議

●2021年10月23日（土）・24日（日）
●滋賀県立大学（滋賀県彦根市）
●大会長　高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津）

テーマ 「子どもらしさって、なあに？ ぼくらしさ・わたしらしさを知っている？ －身体に不自由のある子どもたちの支援を通して発達とは何かを考える－」

教育講演では、糸賀一雄先生の足跡をたどりながら支援とは何か、その根源に触れました。シンポジウムでは、当事者を含めたシンポジストから環境支援という切り口で子どもへのアプローチを語っていただき、特別講演では、院内学級が大切にしていることについて紹介がありました。また、パネルディスカッションでは「電動移動機器」の早期使用について、当事者家族、エンジニア、支援者に語っていただきました。

◎ コロナ禍で1年延期になっての開催。会場ホールでは、障害を持つ子どもの親御さんが製作した移動機器の展示や、BabyLoco とCarry Loco の展示もあり注目を集めた。

主なProgram・登壇者

■大会長講演
「障害のある子どもたちへのPlayful Approach」　高塩純一
■教育講演
「福祉の思想」　渡部昭男
■シンポジウム
「子どもと環境をどのようにつなぐのか」
鯨岡 峻、細田直哉、山口和也、天田美恵、桐山伸也、岸本 眞
■特別講演
「涙も笑いも、力になる」　副島賢和
■パネルディスカッション
「早期電動移動機器使用が子どもたちの発達に及ぼす影響」
西島和秀、篠原 勇、安田寿彦、濱田知加、船橋篤彦
■市民公開講座
①「重い障害のある人の親とともに考える支援のあり方」　児玉真美、木下 真
②「子どもたちからのSOS」　悠々ホルン、松嶋秀明

日本子ども学会学術集会
第18回 子ども学会議

●2022年10月8日（土）・9日（日）
●東海学院大学（岐阜県各務原市）
●大会長　神谷眞弓子（東海学院大学学長）　●準備委員長　池田敦子（東海学院大学客員教授）

テーマ 「With コロナ社会で生きる子どもたち　その発達と未来を考える」

本大会では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が子どもの心身の健康、家庭の経済状況、学習や発達、将来展望に深刻な影響を与え、子どもの多様な「いのち・生活・学び・発達」の危機と困難が報告されていることに対し、子どもが日常の生活基盤を取り戻し、希望をもって生きていくための発達支援システムの創出、発達支援の課題について検討しました。また、理事会企画では、現代的課題である「ギフティッドと子どもの多様性」のシンポジウムを行うなど、多くの論議と学びを得ることができました。

◎ 学術交流の合間に、同大学の学生によるキッチンカーでのコーヒーや軽食の販売やマーチングバンドによる演奏等が行われた。

主なProgram・登壇者

■基調講演
「新型コロナウイルス感染症が子どもの成長と発達に与える影響」　榊原洋一
■基調報告
「コロナ禍に伴う子どもの『いのち・生活・学び・発達』の危機の現状と発達支援の課題
―小中高校生・保護者・教師の全国調査から―」　田部絢子
■企画シンポジウム
「コロナ禍に伴う子どもの『いのち・生活・学び・発達』の危機の現状と発達支援の課題」
①高橋亜美、内田 良、竹内章郎、髙橋 智、田部絢子
②奥田宣子、池田 稜、小森淳子、杉山 章、池田敦子
■理事会企画シンポジウム
「ギフティッドと子どもの多様性」　角谷詩織、知久景虎、岡田啓吾、安藤寿康
■特別報告
「北欧五か国のコロナ禍における子どもの『いのち・生活・学び・発達』の危機と発達支援の動向」
能田 昴

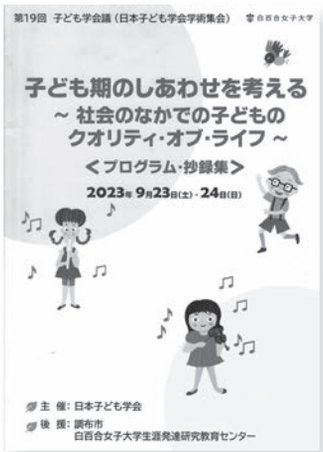
日本子ども学会学術集会

第19回 子ども学会議

- 2023年9月23日（土）・24日（日）
- 白百合女子大学（東京都調布市）
- 大会長　菅原ますみ（白百合女子大学教授、お茶の水女子大学名誉教授）

テーマ 「子ども期の幸せを考える ～社会のなかでの子どものクオリティ・オブ・ライフ～」

2023年4月1日に「こども基本法」が施行され、こども家庭庁がスタートしました。日本の子どもたちにとって記念すべき2023年度にあたり、本大会でも“子どもの今”を概観して“子どものよりよい未来”を展望するための基礎的な学びや議論をすることを目的に、大会テーマを「子ども期のしあわせを考える～ 社会のなかでの子どものクオリティ・オブ・ライフ ～」として開催しました。



◎ コロナ禍でここ数年途絶えていた対面での懇親会が学内カフェテリアで開催された。

◎ 1日目の午後、小林登「子ども学」賞の第1回授賞式が行われた。

主なProgram・登壇者

- 学会主催シンポジウム
  「Happiness for all children:子どものしあわせが実現する社会・政策 こども家庭庁への期待」
  榊原洋一、清原慶子、奥山千鶴子
- 主催校企画シンポジウムⅠ
  「親の別居・離婚に直面する子どもへの支援の現状と課題」
  安倍嘉人、山本佳子、直原康光、池田清貴、小田切紀子、榊原洋一
- 主催校企画シンポジウムⅡ
  「子ども期の逆境とレジリエンスを考える」
  菅原ますみ、舟橋敬一、小川淳子、御園生直美、安藤智子、榊原洋一
- 市民公開シンポジウム
  「子育て・子育ち支援の今:親子のしあわせをつくる」
  眞榮城和美、やたみほ、宮下孝広、櫻井拓見、齋藤れいな
- 小林登「子ども学」賞 第1回授賞式

日本子ども学会学術集会

第20回 子ども学会議

- 2024年9月21日（土）・22日（日）
- 認定こども園 八戸文化幼稚園（青森県八戸市）
- 大会長　油川育子（認定こども園 八戸文化幼稚園園長）

テーマ 「絵本から社会を変える」

絵本は、感じる力、話す力、聞く力、見る力、考える力…そして最も大切な人と関わる力の種を子どもたちの心の中に植えてくれます。また絵本は、子どもたちが生涯心身ともに健康な生活を送ることができるための「心の応援団長の役割」を果たしてくれます。本大会では、そんな絵本の魅力、絵本から広がる活動を中心に、保育・食育・縄文時代・STEAMなど様々な観点から子どもたちを取り巻く環境の在り方を改めて考えていきます。

◎ プレイベントとして、「子どもと祭り―祭り子ども学」を2回、「絵本の可能性」を1回と、計3回の子ども学コロキアムを開催した。

◎ 第21回子ども学会議は、秋田大学（大会長・瀬尾知子）で行われる予定。

主なProgram・登壇者

- 基調講演
  「子どもをささえる絵本の力」　一戸盟子
- シンポジウム
  「絵本から広がる世界」　仲本美央、一戸盟子、油川育子
- 教育講演
  「保育の質と子どもの発達」　中室牧子
- パネルディスカッション
  「保育の質を科学する ―子ども学への示唆」　安藤寿康、中室牧子、藤澤啓子
- 市民公開シンポジウム
  「八戸から発信する学び ―食・歴史・文化―」　瀬尾知子、齋藤信哉、岡本潤子、馬場豊樹
- 学会員によるラウンドテーブル（9件）
- 小林登「子ども学」賞 第2回授賞式

第6回 子ども学会議「代表講演」より

「チャイルドケアリング・デザイン」

子どもは、生物的存在として生まれ、社会的存在として育てられる。生命誕生から始まり、成人に達するまでの成長・発達にあたって、親や大人たちの適切な育児・保育・教育がなければ、子どもはいつでも、どこでも危機にある。すなわち、心や体の障害を起こしたり、病気になったりするのである。Children at risk, whenever and wherever と言える。

したがって、子どもを取り巻く生活環境の全ての「モノ」や「コト」は、子どもの目線に立って、子どもの心を読み取る優しい心でデザインしなければならない。これを、チャイルドケアリング・デザイン“child-caring design”と呼ぶ。「モノ」とは都市、家屋、遊具などの構造物で代表されるハードウェアであり、まず子どもの事故と関係したチャイルドケアリング・デザインを考えなければならない。「コト」とは制度とか教育の仕方・あり方で代表されるソフトウェアである。育児での最大の問題は子ども虐待であり、保育では特に都市部においては施設の不足であり、教育ではいじめなどの教育問題である。

こうした多くの問題はいくつかの要因が複雑に絡み合っていて、チャイルドケアリング・デザインすることは簡単ではない。当然のことながら、その理念として、「子ども学“Child Science”」の果たす役割は大きいのである。チャイルドケアリング・デザインを考えるために「子ども学」があるとさえ言える。

また、チャイルドケアリング・デザインには情報の果たす役割が重要なので、特に大脳辺縁系の働きを考える必要がある。換言すれば、子どもにとって必要なのは、「感性の情報」による「生きる喜び“joie de vivre”」であり、「子ども学」の中に子ども生命感動（情動）学“Child Emotinemics”」の柱も立てる必要があろう。

（第６回 子ども学会議「代表講演」より抜粋）

■プロフィール

小林 登（こばやし・のぼる）

1927−2019。日本子ども学会創設者・日本子ども学会初代理事長。東京大学名誉教授。医学者、小児科医、医学博士。東京大学医学部医学科卒業。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。受賞歴に日本医師会最高優秀功労賞、国際小児科学会賞、勲二等瑞宝賞、武見記念賞など。